ざ瘡と表情認知の関係性に関する予備的研究

○樋町美華¹・羽白 誠² (非会員)

(1 東海学園大学人文学部・2 はしろクリニック)

キーワード: ざ瘡, 表情認知

Pilot study of relation between acne and recognition of facial expression.

Mika Himachi¹ and Makoto Hashiro^{2,*}

(1 Tokaigakuen Univ., 2 Hashiro Clinic Dermatology and Psychosomatics)

Key Words: acne, recognition of facial expression

目 的

わが国において, ざ瘡は一般的な皮膚科疾患である。Kubota et al.(2010)によると中高生の59%がざ瘡を経験していることを明らかにしている。またざ瘡は, 欧米においても一般的な皮膚疾患であると認識されている。このことから, 特に欧米においてざ瘡患者の心理的問題に関する研究はさまざま進められており, ざ瘡患者への心理的支援の必要性が重視されている。ざ瘡患者が抱える心理的問題としては, 抑うつ症状が代表的にあげられるが(例えば, Gupta et al., 1990; 樋町・羽白, 2014), その他にも社交不安(SAD)といった問題を抱えていることも明らかにされている(Bez et al., 2011)。

ところで, SADを抱える者は, 表情認知への感受性が高いと言われ, 特に中立的な表情をネガティブに判断することが指摘されている(藤井, 2012)。それ故, 日常生活が困難な状況にある者も少なくないと考えられている。上述したように, ざ瘡患者においてもSAD症状を示す者は多く, SAD患者と同様の問題を抱えている者が含まれている可能性を指摘できる。しかしながら, ざ瘡患者の表情認知に着目した研究は見当たらず, ざ瘡患者の抱えている問題への対処は十分ではないといえる。そこで本研究では, 自己評定によるざ瘡の有無と表情認知の関係性について検討することを目的とした。

方 法

研究対象 都市部近郊にある大学に在籍する大学生男女94名を対象に実験を行い, 回答に不備が認められた者を除いた65名(男性17名, 女性48名, 平均年齢20.25歳, $SD=0.75$)を分析対象とした。

実験材料 (1) フェイスシート(個人特性および皮膚疾患の有無等を確認するための項目), (2) 対人交流場面での不安: Social Interaction Anxiety Scale 日本語版(SIAS; 金井他, 2004)を用いた。SIASは, 対人交流に対する不安17項目と対人交流場面における効力感の低さ3項目から構成されている。回答は0(まったくあてはまらない)~4(非常にあてはまる)の4件法, (3) 表情刺激: 九州大学で収集されたThe Japanese Female Facial Expression(JAFFE)データベースの中から選んだ1名の喜怒哀楽の顔21枚(中立, 喜び, 悲しみ, 驚き, 怒り, 嫌悪, 恐怖のそれぞれ3枚)を使用した。回答は0(まったく表していない)~10(非常に強く表している)の11件法を用いた。

Table 1 ざ瘡(有・無)およびSIAS合計得点(高・低)における表情認知得点

		中立		喜び		悲しみ		驚き		怒り		嫌悪		恐怖	
		平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
ざ瘡無し	SIAS低群	7.00	0.56	7.67	1.37	4.83	1.43	7.33	2.84	8.33	2.39	8.22	2.15	5.67	1.23
	SIAS高群	6.10	0.98	7.10	1.55	4.53	2.07	8.87	1.78	8.50	1.17	8.60	1.15	5.87	2.31
ざ瘡有り	SIAS低群	5.50	1.37	6.74	1.63	4.85	2.27	7.41	2.04	7.90	1.82	7.56	1.83	5.17	2.99
	SIAS高群	5.55	2.13	6.13	1.78	4.87	2.52	7.45	2.28	7.12	2.35	7.64	2.13	4.75	2.22

実験手続き 最初に実験材料の(1)および(2)を回答するよう指示した。その後, スクリーン上にランダムに呈示された刺激写真について, 中立, 喜び, 悲しみ, 驚き, 怒り, 嫌悪, 恐怖の7つの情動がどの程度強く表れているか11件法で回答を求めた。この作業を21刺激について行った。なお, 刺激写真はヒトが表情を認知するためにかかる時間を考慮し3秒間呈示し, 評定時間は5秒間とした。

結 果

- 1. 対象者について** まず, 現在ざ瘡が出現している者は49名であり全体の75.4%であった。性別別にみたところ, 男性14名, 女性35名であった($\chi^2(1)=.60, n.s.$)。
- 2. ざ瘡の有無によるSIAS得点比較** 現在ざ瘡を有する者とそうでない者のSIAS得点を比較するため t 検定を行った。なお, SIASについては, 2因子構造が認められているが, 金井他(2004)が合計得点を使用し尺度の検討を行っているため, 本研究においても合計得点を使用することとした。その結果, SIAS合計得点において有意差は認められなかった($t(63)=.21, n.s.$)。
- 3. ざ瘡と表情認知の関係性** ざ瘡の有無と表情認知の関係性について検討するため, まず刺激写真に対する情動の評価得点を平均した(各表情刺激3枚)。その後, 各表情認知の平均得点を従属変数, ざ瘡(有・無)およびSIAS合計得点(高・低)を独立変数とした2要因分散分析を行った。その結果, 中立的な表情の刺激写真のみざ瘡の主効果が認められた($F(1, 61)=4.68, p<.05$)。

考 察

まず, ざ瘡の有無ではSAD症状に有意差は認められなかったが, 本研究ではざ瘡の重症度を考慮していないため, このような結果が得られた可能性が考えられる。次に, ざ瘡と表情認知の関係性については, ざ瘡を有することで中立的な表情を中立的であると判別することが困難であることが示された。この結果は, SADに関する先行研究と一致する結果といえる(藤井, 2012)。以上から, ざ瘡を有する者の表情認知についても今後さらなる検討が必要であることが示唆された。

引用文献

Lyons, M. J., Kamachi, M., & Gyoba, J. (1997). Japanese female facial expression (JAFFE), database of digital images. <http://www.kasrl.org/jaffe.html>